

## Crescent

~ Through The International Design Competition for a New Tomihiro Museum of *SHI-GA*  
(poems and watercolor paintings) in Azuma Village ~

1055159 Yuka MIKI

### Abstract

The design of the museum was executed for the requirement of Master of Arts. This design of the museum is also for “The International Design Competition for a New Tomihiro Museum of *SHI-GA* (poems and watercolor paintings) in Azuma Village”.

The Tomihiro Museum of *SHI-GA* (poems and watercolor paintings) was born in the hometown of Tomihiro Hoshino, Azuma Village. It is a museum which continually talk to the people of the dignity and gentleness of life through its poems and watercolor paintings. Azuma Village is just a little village with 4,000 or so residents, surrounded by the deep green poetry of the mountains, the blue sky, and four seasons of wildflowers, groves of rhododendron, and red striped azalea trees. Since it opened in Spring, 1991 as a village revitalization project, the Tomihiro Museum has been standing in the midst of this beautiful scenery.

Hoshino's pieces tell you unpretentiously but firmly of the courage and joy of living which comes from the midst of ordinary nature.

So, the designer proposes the very space which is suitable for the appreciation of *SHI-GA* as a new Tomihiro Museum.

Light Column × Shadow Column × Nature = The space for *SHI-GA*

Light Column/ Shadow Column has *SHI-GA* size as a basic module. It is the continuous space where a diameter changes from 4m to 1.5m from the viewpoint of stage. Then, it plays a structurally main part. Light Column/ Shadow Column is space to think how to live through the communication with *SHI-GA*. It can enjoy *SHI-GA* with Light Column under the natural light. Then, it can enjoy *SHI-GA* with Shadow Column under the artificial light. Then, it can be used for a various exhibition like two sheets one set five sheets one set again. Light Column/ Shadow Column is arranged continuously in the new moon-shaped with making a diameter change around the courtyard.

### Keyword;

Tomihiro Museum, *SHI-GA*, Crescent, Light Column, Shadow Column, Nature, The space for *SHI-GA*

# 要 旨

## Crescent

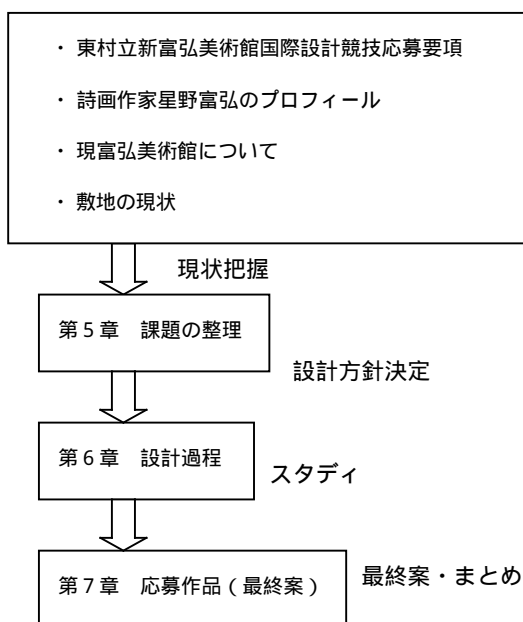
### ～東村立新富弘美術館国際設計競技を通じて～

社会基盤工学コース

1055159 三木 結花

本修士設計では、東村立新富弘美術館建設国際設計競技に参加し、詩画空間にふさわしい新富弘美術館を提案することを目的としている。

本修士設計は、七つの章で構成されている。第1章では、東村立新富弘美術館国際設計競技の応募要綱を整理し、まとめている。第2章では、星野富弘のプロフィールについてまとめ、彼の生い立ちや作品などを理解していく。第3章では、現在の富弘美術館についてまとめ、問題点・課題等を把握している。第4章では、敷地の現状を調査したものをまとめている。第5章では、第2章～第4章までのことをふまえ、課題の整理として設計の方向性を決定し、施設の必要諸室の面積を算出している。第6章では、実際の設計過程で作製した案についてまとめている。第7章では、最終案を掲載し、まとめている。



#### 1. 東村立新富弘美術館国際設計競技の概要

東村立新富弘美術館は、詩画家・星野富弘のふるさと群馬県勢多郡東村に、東村のふるさと創世事業により1991年春に開館した美術館である。

今年は10周年を迎え、この間に、美術館に訪れた人は370万人を突破し、文字通り世界規模で比較対照してみても、他に例を見ることのできない素晴らしい美術館である。

一方、予想以上の反響に、1996年に改装と増築工事を実施し、施設の充実を図ったが混雑の根本的な解消には至らなかった。混雑は館内の室温や湿度の上昇をもたらし、室内環境の悪化とともに作品に対しても悪い影響を及ぼす結果となった。

そこで、「東村立新富弘美術館国際設計競技」を開催し、やさしさにいつでも出会える美術館の創造を目指して、世界中から多彩なアイデアとデザインの提案を広く求めているものである。

この新富弘美術館のテーマとして、以下のことが大きなテーマとして挙げられている。

- ・ 東村の豊かな自然の佇まいを生かし、詩画家・星野富弘という生き方に出会える場所であること。
- ・ 詩画という表現形式に最もふさわしい鑑賞の場であることなどを基本として、星野富弘さんが追い求め続ける「やさしさ」や生きることへの「励まし」、つまり「愛」の世界を造り上げること。

表1 計画条件

計画地	群馬県勢多郡東村大字草木
敷地面積	約 70000 m <sup>2</sup> (計画地約 65000 m <sup>2</sup> 、借地約 5000 m <sup>2</sup> )
床面積	約 3000 m <sup>2</sup>
建築工事費+ 外構工事費	12 億円
展示作品数	100 ~ 120 点

## 2. 設計の方向性

計画地は、豊かな自然が多く残る場所にある。そのため、周辺の美しい景観を損ねない美術館としなければならない。また、計画地は、借地を含めると4つの敷地が与えられている。これらの敷地をどう利用していくかも考える必要がある。本修士設計の第2章～第4章までの美術館の現状や敷地のことを整理し、以下の設計の方向性を定めた。

- ・星野富弘の詩画と向き合う事のできる展示空間を提案する。
- ・詩画作品の展示空間は、作品自体があまり大きい物ではないことと、一つの詩と絵をゆっくり味わう為には、大きな展示空間は必要としないと考え。そこで、展示空間は、1つ1つの詩画作品をじっくり鑑賞することのできる空間（例えば、小さな空間、若しくは展示室内で区切られた空間など）を提案する。
- ・詩画を鑑賞する美術館とは別に、周りの自然環境を活かした自然を觀賞する空間を提案する。
- ・それら2つの空間を分離したり、融合したりできる空間を提案する。
- ・管理部門と一般客の動線を分けるようにする。
- ・現在ある美術館との関係を考える。
- ・外構が有効に利用できるように工夫する。

これらを設計の方向性とし、スタディを重ね、案を決定していくこととした。

## 3. 応募作品の設計コンセプト

以下が、最終的に応募した案の設計コンセプトである。

星野富弘の詩画は、花や草や樹といった見落としがちな身近な自然を詩と画によって再構成することにより、一人の人間あるいは生命（いのち）あるものとして生きることの真実を訴えている。一方、大空間をパーティションによって仕切るだけの従来型の美術館では、生きることを問う詩画の鑑賞空間としてふさわしいとは言えない。そこで、我々は新富弘美術館として詩画の鑑賞にふさわしい空間を提案する。

光の筒 × 影の筒 × 自然 = 詩画のための空間  
(Light Column) (Shadow Column) (Nature)

光の筒 / 影の筒は詩画サイズを基本モジュールとして持ち、直径が4m～1.5mまで段階的に変化する連続空間であり、構造的にも主要な役割を果たしている。光の筒 / 影の筒は、一人一人の人間が星野富弘の詩画に包まれながら、詩画とのコミュニケーションを通じて生きることそのものを考える空間である。

光の筒では自然光のもとで、影の筒では人工光のもとで詩画を鑑賞することができる。2枚1組、5枚1組といった様々な展示に対応することができる。光の筒 / 影の筒は中庭を中心に直径を変化させながら連続的に三日月状に配置される。結果としてできる余白は、詩画の余韻を中庭や前庭の自然とともに楽しむ移行空間である。

敷地計画としては、中心施設である新富弘美術館を現美術館敷地と工場跡地をつなぐように配置し、南側借地には駐車場、山側にはテラスを設けている。全体として、暗闇の中で湖に映る、ほのかに光る三日月をイメージしたものとしている。

#### 4. 応募作品

以下の作品は、設計競技に提出した応募作品である。(A1版の縮小)

